

審査の結果の要旨

氏名 アヤラ バルボア ラファエル アレハンドロ

論文題目 Architecture as Prosthesis: An urban evolution through the extension of architectural identity

(義肢としての建築：建築のアイデンティティの拡張による都市の変化に関する研究)

本論文は、義肢（Prosthesis）という身体を補完する役割を果たす人工物を概念的に捉え、それを建築の増改築を経て変化する都市を考察するための足がかりとして提案、検証するものである。

本論文は、序章、第1章から第6章の本論と、結論から構成されている。

第1章から第3章までは、義肢という概念の定義を多面的に考察している。義肢という概念自体は建築の言説では少数のケースを除き、ほとんど言及がなされていない。そのため、本論文においては、まず建築・都市と身体のアナロジーを考察することから始まり、義肢を身体性の拡張、または欠損の補足という観点から見ることで、身体性を軸として、義肢の概念の建築論への接続を図っている。

第4章と第5章においては、義肢の概念を建築・都市の分析における具体的な手法として発展させる上で、東京における建築・都市の一般的特徴の考察をまず行っている。この中で、渋谷の大通りにおける、多くの看板や広告などが時間の経過とともに付加された商業建築群、路地においてブリコラージュ的に増改築が繰り返された木造建築群などが分析対象として選択されている。これらの建築群から、さまざまな義肢のカテゴリに要素を分類することが行われる。

第6章においては、前章で導出された分析手法を用いて渋谷、新宿、銀座、上野を対象として分析を行い、義肢という概念の建築・都市の考察における有用性を示すことを試みている。

Prosthesisという概念を都市・建築の理解に参照したことは興味深く、審査会においても高く評価されたが、一方でいくつかの問題点が存在することも審査会において指摘された。

まず第一に、都市分析で用いた身体アナロジーについて、義肢と近い概念である一方で論文においては全く無関係なものとして取り扱われており、混乱を招くものであることが挙げられた。次に、分析において、個々の建築における看板や広告の成立には都市の状況が深く関係しているはずであるにもかかわらず、本論文ではまったくそこに触れていなかったことがある。義肢の論から、性急に広告・看板の分析に移っていることについても、多くの指摘が挙げられた。この中で、義肢の概念を単なる建築における広告・看板の分析のみへの適応に限定することへの疑問が多かった。

このような指摘に対して、アヤラ君は真摯に回答し、本文の加筆修正をおこない、また追加の分析を実施することで対応した。また、挙げられた問題点も前述したような本論文の大局的な成果を損なうものではない。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。